

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 67 号 2020 年 11 月 発行

日本口承文芸学会

〒168-8508 東京都杉並区大宮 2-19-1

高千穂大学 立石展大研究室

Tel 03-3317-4077 (内線3421)

FAX 03-3313-9034

E-mail info@ko-sho.org

「新しい生活様式」における「密接」の復権

佐藤 優

語ることができない。はなしを聴くことができない。

これまで経験したことがない現状に対し、この学問を志す会員のみなさんは、春先以降多くの〈戸惑い〉を抱きながら過ごされたのではないだろうか。

というのも、口承文芸学は、これまで多くの方の声を聴き取り、それを資料化することで学問を前進させてきた。学史を振り返ってみると、昭和 30 年代前半に重さ 10 キロを超える録音機材を背負い、昔話を訪ねて夜間のみ通電する北東北の山間地に足を運んだ若い研究者に対し、地元の方々は、特別に日中電気を通してくれた。そのおかげで、都会から来た若者は「昼ムカシ」を録音できたと『芸能』第 2 巻第 11 号（芸能発行所、1960 年）にある。このことは、短時間とはいえ、地域の人々と顔をつきあわせた密なる関係性を築けたからこそできた調査であったといえるだろう。「密接」が忌避される今日、やはり考えさせられるエピソードである。

ところで、この学問は、それぞれに生活を営む社会と「密接」に関わりながら「語り」を通して地域文化に貢献してきた。こうした側面は、他の学問においてあまり目にするのではなく、この学問の大きな特徴として忘れてはいけないことであろう。

以上のことをふまえてみると、今回のコロナ禍で示された「3 密」のひとつ「密接を避ける」は、口承文芸学の根底を揺るがす大きな問題ではないか。そして、これが会員のみなさんの〈戸惑い〉として心の中に横たわっているのではないだろうか。そこで、本号の『伝文』では、この数ヶ月間「新しい生活様式」の中で研究や語りの実践活動をされてきた方々の声を紹介することで、会員諸氏の〈戸惑い〉を少しでも払拭できるような紙面構成を考えてみた。

具体的には、愛知県の枝下^{しだけ}用水資料室で精力的な研究活動をされている遠志保さんからご報告をいただいた。また、日本民話の会などの活動に長年携わっておられる米屋陽一さん、市川民話の会においてご自身も語りの実践経験豊富な根岸英之さんのお二方から、コロナ禍における語りの実践活動について興味深いご報告をいただいた。

コロナ禍にあっても正面から自らの課題と真摯に向き合い、ご活躍されている方々の率直な声をお届けすることで、少しでも会員の皆さんの〈戸惑い〉を払拭できれば幸いである。そして、私自身も「新しい生活様式」の中における「密接」の復権に少しでも貢献できるよう、尽力したいと考えている。（岩手県）

追悼

佐々木達司さん 一口承文芸・太宰治・しじみラーメンのことなどー

米屋 陽一(千葉県)

2020年7月7日、「日本口承文芸学会」設立当初からの会員の佐々木達司さんが病気のため、青森県五所川原市の病院で亡くなりました。87歳だった。著書に『津軽ことわざ辞典』『青森県なぞなぞ集』『昔話の周辺—津軽口承散策』『ことわざの周辺—津軽口承散策』、責任編集に『青森県昔話集成』(全2巻)などがある。

学生時代、太宰治の『津軽』を読んで津軽を歩いた。卒業後、私立中高の教員になった。数年後に平松重夫さんが同僚になり、『女生徒』のなかの「お寺の娘さんのキン子さん」は、母・平松(雲居)基子だと知った。洋裁学校に通う基子さんの級友が『女生徒』原作者・有明淑さん。淑さんの日記風作品ノートをベースに、『女生徒』(1938年)は成立した。「でこちゃん」は、淑さんの姉の有明貞さん。『娘に伝えたいこと』の著者・町田貞子さんだ。その娘が評論家の木元教子さん。三人からは「女生徒」「有明淑」伝承を聴いた。

教員時代の初期、学会の大会シンポジウム会場で佐々木ご夫妻にお会いした。それ以来、親しくなり、さまざまな刊行物をいただいた。1998年7月、青森県近代文学館で収蔵資料展「没後50年太宰治一弱さと優しさ」が開催され、津島家から寄贈された「ノート」と「有明淑略年譜」(筆者作成)のパネルが展示されることになった。「ノート」の著作権継承者は貞子さん。文学館との橋渡し役を引き受けた。

太宰文学にも造詣の深い佐々木達司さんに電話でこの流れを話したら、たいそう喜ばれ展示開催前『東奥日報』は記事にした。2000年2月、文学館資料集第一輯『有明淑の日記』が刊行された。太宰治関連の仕事は佐々木さんの後押しがあったからだ。

2004年8月、國學院大學・伝承文学専攻の院生二人、日本民話の会の数人と津軽を訪ねた。佐々木さんは青森県の口承文芸全般をご教示くださった。川倉の賽の河原地蔵尊、イタコの口寄せの場、冥婚(死後の結婚)の写真・人形の展示場所…。伝承の語り手・対馬てみ女の紹介もあった。

「美味しいラーメンがあるんですよ」と十三湖の「しじみラーメン」店へ。舌鼓を打ちスープを飲み干した。数年後、「先生、しじみラーメン、食べに行ってもいいですか?」と電話を掛けたら「えっ!」と驚かれ、ハハッと笑って「いいですよ、どうぞ、どうぞ!」と。「五所川原 立佞武多」などを見て歩いた。

2017年10月、佐々木達司編集・発行の個人誌『津軽の民話 落ち穂拾い』第12号=終刊号が届いた。「生涯現役」の喜びを伝えた。2019年末、会報『伝え』(第66号)「巻頭文」依頼の電話を掛けた時、「もう歳だから…」と渋っている様子だった。「先生、生涯現役ですよ、まだ、まだ、これからですよ!」「それじゃあ、書くことにしようか、何を書いたらいいのかなあ!」、あれこれ世間話をして電話を切った。この電話が最後となり、この原稿が学会の最後の活字になるとは…。予期せぬ出来事であった。

「先生、しじみラーメン、食べに行ってもいいですか?」、もう一度でいいから電話を掛けたかった。心からご冥福をお祈り申し上げます。

コロナ禍の枝下用水資料室

遠 志保(愛知県)

はじめに

枝下(しだれ)用水は愛知県西三河の主に旧豊田市域を流れる農業用水で、約130年の歴史がある。2008年春、筆者が豊田市矢作川研究所に入ったのを機に、豊田土地改良区の委託事業として枝下用水史の編集作業が始まった。編集委員会は人文系研究者と地域に暮らす人とで構成し、枝下用水の歴史を矢作川流域の環境を担ってきた人びとの歴史として捉え直す編集方針をたてた。『枝下用水史』(風媒社、2015年)刊行後、続編執筆の委託を受け、豊田土地改良区資料室としてさらに活動を広げたが、2020年3月、委託事業が終了することになった。

本稿では、筆者らがその後、どのように活動を続けてきたのかを記してみたい。

枝下用水資料室の開室

12年間の委託事業で枝下用水に向き合い、地域の人びととともに調査を進めていた筆者らは、これで終わるわけにはいかないと、枝下用水沿いに安価な空き家を探すことにした。自宅でも研究を続けることはできたが、枝下用水のそばに研究拠点を置くことが、いかに大切かをこれまでに感じていたからだ。

さまざまな人が知恵を貸してくれた。そして最終的に枝下用水の名の由来となる豊田市枝下町の自治区長らが住民に諮って、「枝下町老人憩の家」として使われている古い民家に間借りすることを決めてくれた。地域の歴史に興味を持つことが暮らしへの愛着につながる。そのために筆者らを必要と考えてくれたのである。コロナ禍で3月は多くの地域で自治区総会が中止になっていたが、町民の総意を得るため、枝下町は総会をおこなった。そして3月末、引っ越しは老人憩の家の方たちが総出で手伝ってくれた。

コロナ禍の資料室

4月2日、枝下用水資料室(以下、資料室)が開室した。お知らせは枝下町全84戸に配布されていた。静かな一日だった。夕方、作業を終えて帰ろうとしたとき、入口のガラス戸に人影が映った。誰が来たかと戸を開けると、高齢男性の後ろ姿だった。「資料室ができたっていうからちょっと見に来た」と言われた。コロナ禍で、地域の人びとにどのように接したらいいかわからなかったが、それは地域の人びとも同じだったのだ。遠慮がちに、畑の野菜を持って訪ねてきてくれた方があった。

「遠さんは野菜買う人？」と聞かれた。ワラビ、タケノコ、ナス、キュウリ、ピーマン、資料室が始まって、季節のうつろいを野菜で知ることができるようになった。

それでも5月の連休前後には、資料室は閉室を試みた。資料室ではDropboxにあらゆるデータを集めて共有し、Evernoteを使って日報を書き、離れていてもいま何が起きているかを共有できる。研

究以外の話題も折り込み、オフラインの会議はなくても、リモート会議を繰り返しおこなった。閉室は形だけで、自宅で続けることができた。

数日ぶりに資料室に出てみた。ポストには郵便物だけでなく、切手のない手紙がいくつも入っていた。訪ねてきた人がいたのだ。こんなときだからこそ、資料室は開室し、変わらず調査研究活動を続けようと思った。

6月になり、枝下旧用水路遺跡の清掃活動再開を決めた。2017年からこの活動を始めており、枝下町の人びととの出会いもここからだった。清掃活動をとおして地域の人びとが枝下用水を知る。自然とのふれあいを通して歴史を実感したいという渴望が、より強く感じられた。暑くなりがちの開室の時期がコロナ禍と重なって、適度な物理的距離を保ちながら、気持ちの強いつながりをつくりあげることになったのかもしれない。

新たに資料室サロンも始めた。資料室への立ち入りにくさを払拭するため、サロンで地域の人々の思いつきを聞きながら、自由に質問したり発言したりする時間を作った。古い民家は、コロナ対策向けに風通しがよいばかりでなく、そんな試みが心地よくできる場の力があるように思う。集まる人びとは資料室の活動が続くようにと、物心両面で支えてくれる。

地域の人びととともに知る資料室へ

資料室を開室して半年が経った。資料室は以前の事務所から矢作川を約3km 遡っただけだ。しかし筆者らの環境は大きく変わった。そこはダムに水没した枝下旧用水路だけでなく、鉄道の廃線路と廃駅、吊り橋の遺跡、渡船場跡など場の記憶の宝庫だ。そもそも資料室は枝下用水旧水源事務所跡にある。ここにはこの土地の記憶と知恵があふれている。

研究は個人のものではない、関わろうとする人たちとの共有の財産であると実感し、調査研究を続

けてきた。地域の人びとは今日も資料室にやっけて、なんでもない会話をし帰っていく。

フィールドでの調査者と被調査者の距離の感覚を考えることが少なくなりつつあるフィールドワーカーにとって、社会全体を巻き込んだ感染症下のフィールド経験が、こんなことを考えさせることになった。

これからこの枝下町で、たくさんのことを学んでいくことになるだろう。



6月22日清掃活動の後、枝下用水資料室の前にて撮影

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大により、4月7日「緊急事態宣言」が発出された。不要不急の外出自粛、3密（密閉・密集・密接）・ソーシャルディスタンス（社会的距離）が強調された。

伝統的な伝承の語りの場や新しい語りの場は、いうなれば3密のなかで行われてきた。保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学は、事実上休校状態になった。公共の施設も使用不可能になった。コロナ禍におびえながらの自粛生活のなかで、全国の「語りの会」の活動は、3月以降、開店休業状態に陥ってしまった。「日本民話の会・語りの会」も活動中止を余儀なくされた。試行錯誤の結果、「語りの会」のラインが作られ、おもに東京・首都圏の会員30人が加わった。それぞれの地域・民話の紹介、情報交換、質疑応答など、楽しい会話が始まった。事務局から次のような提案が郵送された。本稿の資料提供・執筆協力は、「日本民話の会・語りの会」の齋藤美智子氏。

1 「5分で語れる50の昔話」（再話）募集・2020年6月

①表題の5分は目安として、400字詰原稿用紙3枚（1200字程度）。②再話された昔話は選ばない。③語りたい昔話を選ぶ場合、伝承の語り手から聞いた昔話、またはその資料・書籍から選ぶ。④参考資料『聴耳草紙』（佐々木喜善）『日本昔話大成』（関敬吾編）『日本昔話通観』（小澤俊夫他編）『昔話十二か月』（松谷みよ子編）『日本昔話百選』（稲田浩二編）『日本むかし話百話』（日本民話の会編）、「日本民話の会」の採訪による冊子は多数あります。機関誌『民話の手帖』『聴く語る創る』他、膨大な資料をぜひご活用ください。）

「語りの会事務局」に届いた第1次原稿は、9月中旬に50話になった。第2次募集中。現在、10話が届いている（10月4日現在）。後日、語りの勉強会・検討会や編集委員の検討会などを経て、語りの台本集が発刊される。

2 「語りの会」再開

2月の「日本民話の会・語りの会」例会以降、すべての会合は中止になった。「日本民話の会・語りの会」例会・小さな語りの会再開について（先日、会場となる「エコギャラリー新宿」にて、役員有志と担当者との打ち合わせを行いました。/・日時：10月18日(日)午後1時から2時間程度/・内容：①参加者による語り②今後の活動についての話し合い③外の芝生で交流（天候による）/・定員：規定50人の半分の25人（当日は会員のみ20名）/・語り・参加の申し込み：10月1日(木)から受付開始/・注意事項①外出時：出かける前に各自検温・体調のチェック（不調の時は不参加）②入館時：入口でアルコール消毒・検温（不接触の体温計で検温・エコギャラリー新宿備品）③マスク：全員着用（語り手はフェースシールド可）④換気：窓を開けて30分に1度換気⑤休憩時：入室退室は密にならないこと/⑥打ち上げ：なし/⑦ライン・ズーム・フェイスブックについての情報交換（可能なら試みとして会場からズームで、語り手と

3 新しい生活様式と語りの場—東京・首都圏の会員の活動から—

①Nさん（東京・練馬区在住）の活動：個人的に活動。/㉞8月11日、語りの場は区内の知人宅。語り手・聞き手5人はマスク着用。間隔を取って座る。30分間。語りは「イカとスルメ」「風呂屋の貧乏神」など。/㉟仕事として毎週1回。高齢者デイサービス施設、3時間のリクレーション係。午前・午後の各1時間間30分。桃太郎体操・唱歌・童歌・手遊び・折り紙・語り「イカとスルメ」など短い話。

②Hさん（茨城県在住）の活動：個人的に活動。/9月5日、土浦市図書館で「おはなし会」。30分。予約した親子数組。親子以外は手をつながない、触れない。水分補給を忘れない。マスクオンでも「目は笑っている？」を確認します。ウオーニングアップで朝から大声で笑いました。イタリアの地面からマカロニの雨が降る話をして。目の不自由な人の為のフェイスシールドをしますが、マスクになる可能性も考えます。先が見えませんが、「おはなし会」そのものが幸せです。親子ペアで歌い遊びながら終わります。

③Fさん（山梨県在住）の活動：個人的に活動。/9月4日、山梨市・小学2年生50人。教室で1時間語る。語り手は子どもたちから少し離れてマスクなしで語り、子どもたちは全員マスク着用で聞く。「でいだらぼっち」「たぬきえいもん」、紙芝居「甲府空襲・かみず」。

④Mさん（東京・調布市在住）の活動：数人で活動。/㉞9月22日、広い図書室で10人くらいの幼児・低学年さんでちんまりとしました。本（マンガ）を読んでいた中学生や高学年は、じやますることなく、時々耳を傾けながら、ネタばらしを小声でしていました。「おはなし会」ができて、みんな楽しく穏やかな気持ちで帰っていきました。もちろん私も。「風の神と子ども」「お月さまってどんな味」「化け比べ」などを語りました。/㉟9月の定例の「おはなし会」は、調布市にある「S学園」です。長テーブルとイスが置かれており、そこに座ります。今までは円陣で絨毯に座っていました。子どもたちには、長テーブルが「大人みたい!」で好評でした。子どもたちはマスク着用。私たちはプラスチックの透明なマスクを使用しました。/㊱狛江市のI児童館でも、子ども向け・赤ちゃん向けの「おはなし会」も始まりました。

〈追記〉

10月18日(日)午後1時30分～4時、「日本民話の会・語りの会」主催の「小さなかたりの会」がエコギャラリー新宿で開催された。第1部：ZOOM（スクリーン映像）による「遠野から」大平悦子の語り、「山梨から」藤巻愛子の語り。聞き手は全国のZOOM参加者10数名。第2部：「新宿から」8人の語り。参加者10人。語り手（マスクなし）と聞き手との距離は2m。第3部：米屋陽一のミニミニ講座。8か月ぶりの再開。初めての「ZOOM語り&語りの場」の試みであった。

コロナ禍で中断した市川民話の会の活動

根岸 英之(千葉県)

千葉県市川市で1978年(昭和53)から活動している市川民話の会は、発足当初は地元の古老から話を伺い資料集にまとめることをメインに活動し、並行して会員が語って伝える活動をしてきたが、ここ15年あまりは、語って伝える活動がメインになっている。

2020年2月16、17日、市の文化団体が合同で行う「天空の文化祭」で、語りの披露をしたのが、対外的に実施できた最後のイベントで、新型コロナウイルスの流行で、3月に入ってから毎月1回の例会も中止し、ダイケアサロンなどに招かれて語る予定も無くなった。

5月からは、いきいきセンター(60歳以上が利用できる市の施設)主催で、市川の民話を参加者も語ってみようという、一年間の連続講座を組んでいたが、これも中止せざるを得なくなった。6月、7月には、2つの公民館の主催講座として、子ども向けに市川のこわい話を中心に聴いてもらうイベントを企画していたが、これも中止となった。

例会をいつから持つか事務局で検討したが、10月に市川市と共催で開催する、会としてもっとも大きな事業である文化祭「市川の民話のつどい」が計画されていたため、その内容を協議することが必要だろうと、7月に例会を再開し、例年5月の総会をこれに充てた。この段階では、10月のイベントは各団体の判断に任せるとの方針だったので、会としては開催する前提で検討していこうということになったが、やがて、市の方から、今年は共催行事はすべて見合わせるとの判断が出され、会のメインイベントも開催することがかなわなくなった。

一方、市川市からは共催行事が中止となる代わりに、市の施設を稽古のために無料で使用できる機会を設けてもらえ、7月下旬にホールを借りて、語りの練習を行った。これに刺激を受けて、半年間、何もしないより語りの練習をしようという気運が高まり、8月にも語りの練習会を実施した。

この頃には、コロナの完全な収束は見込めないことも分かり、感染に気を付けながら、活動をしていってもいいのではないかという声が出され、11月26日に、定員を制限して、自主的な「市川の民話のつどい～民話を聴いて厄ばらい」を開催することが決まった。市川には辻切り、疱瘡除けの妙正大明神、コレラ除けのお経塚などの病厄に関わる伝承も伝わっており、それらに光を当てたプログラムを予定している。会員にとっては、普段は語ることの少ない話に挑戦する機会にもなっていると見える。

また、以前から地域の話語って残したいと申し出ていらした昭和6年生まれのお話を訪ね、探訪も9月から再開することができた。これまでの探訪は音声録音のみであったが、動画撮影し、新しい記録方法を模索しているところである。

市内の学校もまだ落ち着かないが、10月中旬に、地域の民話を語ってほしいという小学校からの依頼が入った。子どもたちに地域の民話を生の語りで伝えていくことは、本会の大きな役割の一つであり、少しでも、依頼が回復することを願っている。

自粛期間中、取り貯めていた録音資料の翻字や、会員の語った映像を動画サイトにアップすることも考えていたが、時間的制約もあり、実行には至らなかった。会としての課題の一つである。

コレラ禍を経験して、日常的に対面で会って話す機会が減ったことを実感した。その中で、民話の会としては、感染防止に留意しながら、少しずつ、対面による語り―聴く機会を取り戻していくこと

の必要性を感じている。また、これまで聴いたり、語ってきた音声・映像資料を、ウェブ上に公開していくことも、代替的な伝承の方法なのではないかと考えている。

新しい伝承様式というものがどのようなものか分からないが、それぞれの時代に即した、伝承様式があるのだろう。学会がコロナ禍に置かれた各地の語り活動の実態を把握・記録していくことも、重要な役割と思われる。そこから新たな研究の視点が拓かれていくのではないだろうか。

2020年度の第44回大会と第78回研究例会のお知らせ

新型コロナウイルス感染防止のため、これまでお知らせしてきましたとおり、第44回大会はオンラインで、8月8日～22日の期間にウェブ上で開催いたしました。ご協力・ご参加ありがとうございました。また、第78回研究例会は、別紙でご連絡のとおり、11月28日にZoomを用いて、オンライン開催をいたします。皆さまのご参加をお待ちしております。

事務局便り

○会員の異動（敬称略・五十音順）

《新入会》 浦野和枝（神奈川）・来栖史江（兵庫）・鈴木麻位子（千葉）・藺田郁（大阪）・宮川耕次（沖縄）・山内慶子（茨城）

《購読会員 新入会》 旭屋書店外商部

《退会》 荻野裕子（京都）・川越ゆり（山形）

《逝去》 佐々木達司（青森）・恒松多美子（広島）

○受贈書籍(2020年2月以降拝受)

- ・岩本通弥編著『方法としての〈語り〉-民俗学をこえて-』 2020年4月 ミネルヴァ書房
- ・菊地暁・佐藤守弘『学校で地域をつなぐ-『北白川こども風土記』から-』 2020年6月 小さ子社
- ・小田淳一『レユニオンの民話』 2020年3月 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所
- ・人間文化研究機構『令和2（2020）年度国立歴史民俗博物館要覧』

○日本口承文芸学会事務局

〒168-8508 東京都杉並区大宮2-19-1 高千穂大学人間科学部 立石展大研究室

Tel: 03-3317-4077（内線3421） Fax: 03-3313-9034

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。